

# 門川町教育研究所

|      |                       |       |
|------|-----------------------|-------|
| I    | 研究主題                  | 14-1  |
| II   | 主題設定の理由               | 14-1  |
| III  | 研究目標                  | 14-2  |
| IV   | 研究仮説                  | 14-2  |
| V    | 研究構想                  | 14-2  |
| 1    | 研究方法                  | 14-2  |
| 2    | 研究計画                  | 14-2  |
| 3    | 研究全体構想                | 14-3  |
| VI   | 研究組織                  | 14-3  |
| VII  | 研究内容                  | 14-4  |
| 1    | 一単位時間指導過程の研究          | 14-4  |
| (1)  | 基本的な考え方               | 14-4  |
| (2)  | 研究の内容                 | 14-4  |
| (3)  | 研究の振り返り               | 14-6  |
| 2    | 日常活動でのドリル学習の効果的な指導の研究 | 14-7  |
| (1)  | 基本的な考え方               | 14-7  |
| (2)  | 研究の内容                 | 14-7  |
| (3)  | 研究の振り返り               | 14-9  |
| VIII | 成果と課題                 | 14-10 |
| ○    | 参考文献                  |       |
| ○    | 研究同人                  |       |

## I 研究主題

### 確かな学力を身に付け、将来に夢をもってたくましく生き抜く子どもの育成 ～ 基礎・基本の定着を図る門川町学力向上授業プランの創造 ～

## II 主題設定の理由

### ○ 今日の課題から

今日の社会は、将来を展望しにくく、景気の問題や雇用の多様化・流動化、少子高齢化問題のようなネガティブな情報が非常に多い。そのために、若者は、将来に不安を感じ、夢や目標をもって自立して働く、ステップアップする、自ら人間関係を深めるといった、前向きな生き方が難しくなっている。また、精神的・社会的自立の遅れなど、若者を取り巻く多くの課題も指摘されている。

このような状況の中、将来を担う子ども達に、今最も求められていることは、社会の激しい変化に流されることなく様々な課題にたくましく対応し、社会人として明るい展望をもって自立するために必要な「生きる力」を身に付けることである。

### ○ 地域の課題から

このような社会情勢の中、門川町では、行政・関係機関、地域をあげて「明日の門川町を担う人づくり」を行うため、「夢・人・町づくり」の教育創造をめざして教育実践を行っており、学校教育が果たす役割は大きい。このような地域社会の期待に応えるためには、何よりも小・中学校9年間の教育をとおして、知・徳・体の調和のとれた成長を図りながら「確かな学力」を身に付けさせ、将来に夢をもってたくましく生き抜く「生きる力」をもった児童生徒を育てることが必要である。

### ○ これまでの研究から

昨年度は、児童生徒の「生きる力」を育てるために、学びの基礎力を育てる指導方法や学校生活に困難を感じる児童生徒一人一人の実態に応じた支援の工夫といった研究に取り組んだ。この中で、実態調査や検証授業などの研究をとおして「授業に役立つヒントカード」や「支援アイデア集」を作成し、各学校に提供することができた。また、研究所便り“ふれあい”をとおして、学力調査分析の結果や日常生活と学習を関連づけた様々な情報を家庭や学校、地域に発信する等の成果をあげることができた。しかし、門川町の児童生徒は、学習への意欲や進路への意識はあるものの、基礎的・基本的な知識・理解が十分身に付いているとは言えず、全体に伸び悩んでいる状況である。

### ○ 本年度の研究について

そこで基礎・基本の徹底を目指して、小テストを活用した確かな評価や日常活動でのドリル学習の工夫といった、学力向上に直接結びつく研究に、2か年に渡って取り組むことにした。

まず本年度は、研究1として、一単位時間指導過程の研究を行い、授業モデルを作成するとともに、基礎・基本の定着を図る効果的な小テストの作成・検証を行う。研究2として、日常活動でのドリル学習の効果的な指導の研究を行う。また、実践的で役立つ研究にするために、実態調査をもとに実践を積み重ね、その成果を各学校に発信していく。さらに次年度は、この研究の成果をもとに、町内の小・中学校が足並みを揃えて実践するための研究・啓発に取り組む計画を立てた。

このような、基礎・基本の定着を図る授業やドリル学習の工夫に関する研究をとおして、門川町の小・中学校が共通実践を行っていけば、児童生徒の学力が確実に向上し、その結果、確かな学力を身に付け、夢に向かってたくましく生き抜く児童生徒の育成を図ることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

### Ⅲ 研究目標

将来に夢をもってたくましく生き抜くための原動力である「確かな学力」を身に付けさせるために、基礎・基本の定着を図るための門川ならではの学力向上授業プランを創造する。

### Ⅳ 研究仮説

#### 仮説 1

一単位時間指導過程に、定着を図る小テストを取り入れる工夫を行えば、学習意欲が高まるとともに、基礎・基本の定着を図ることができるであろう。

#### 仮説 2

日常活動の中において、ドリル学習で鍛える場を設定し、指導の在り方を工夫すれば、学習意欲が高まるとともに、基礎・基本の定着を図ることができるであろう。

### Ⅴ 研究構想

#### 1 研究方法

##### ○ 教育研究班

#### 研究 1 一単位時間指導過程の研究

- ① 小テストを取り入れた指導過程モデルの研究・作成
- ② 小テストモデル集の研究・作成（中学校社会科）
- ③ 授業実践による検証
- ④ 各校による実践状況調査・実態調査

#### 研究 2 日常活動でのドリル学習の効果的な指導の研究


- ① ドリル学習の課題の明確化
- ② ドリル学習Q&A・ドリル問題モデル集の研究・作成（小5算数・中2数学）

##### ○ 情報発信班

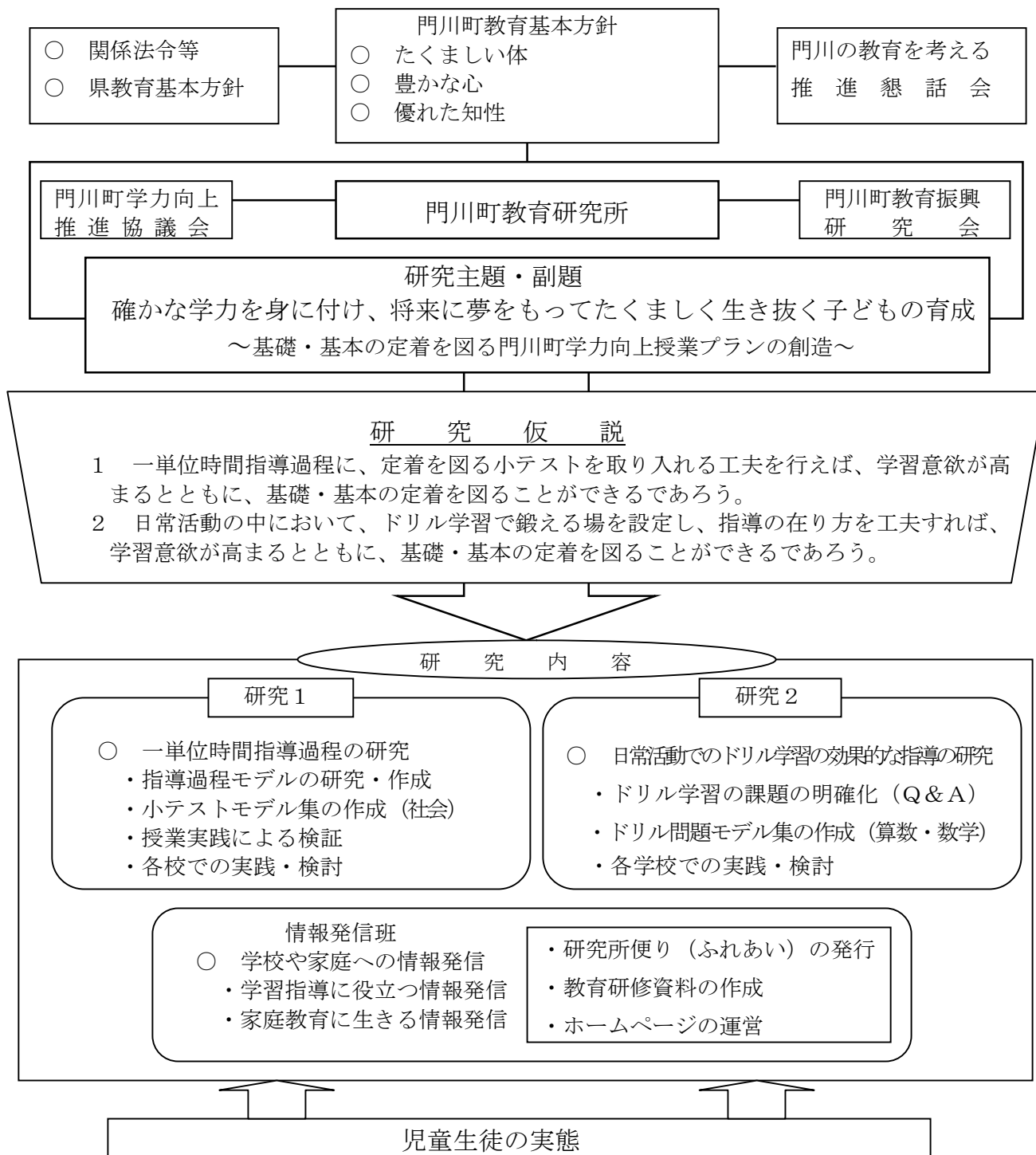
- ① 学習指導に役立つ情報発信
- ② 家庭教育に生きる情報発信

※ 広報ふれあい、研修資料、ホームページ運営をとおして情報を発信する

#### 2 研究計画

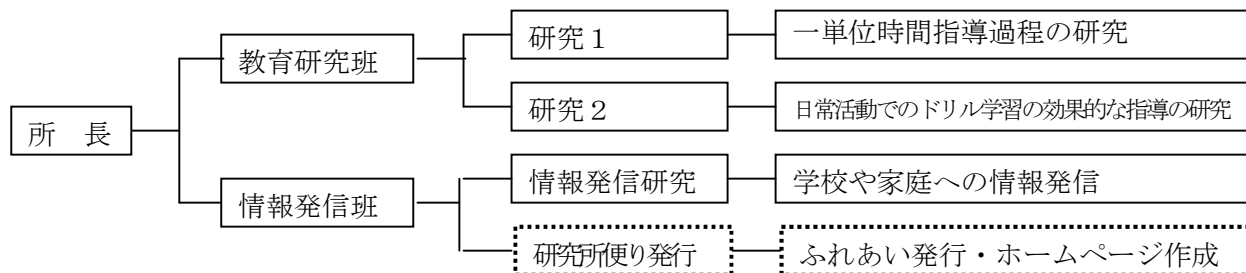
| 分野   | 研究内容                  | 平成21年度   | 平成22年度                             |
|------|-----------------------|--|------------------------------------|
| 研究 1 | 一単位時間指導過程の研究          | ○指導過程モデルの作成<br>○小テストモデル集の作成<br>○授業での検証   | ○指導過程の検証<br>○小テストの作成・検証<br>○授業での検証 |
| 研究 2 | 日常活動でのドリル学習の効果的な指導の研究 | ○ドリル学習課題の明確化<br>○ドリル学習Q&Aの作成<br>○ドリル問題モデル集の作成  | ○ドリル学習の実践検証<br>○ドリル問題の作成と提供・検証     |
| 情報発信 | 家庭や学校への情報提供           | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">啓発・研修資料の発行</div>  |                                    |

### 3 研究全体構想



【図1】 【研究全体構想図】

### VI 研究組織



【図2】 【研究組織】

## VII 研究内容

### 1 一単位時間指導過程の研究

#### (1) 基本的な考え方

学力向上のためには、毎時間の学習がどのように定着しているか、何がわかって、何がわかっていないのかを、確かな根拠によって判断することが必要である。そのために、小テストの結果など、学力にもとづいた確かな判断が求められる。

#### (2) 研究の内容

##### ア 実態調査の実施

授業中での小テスト活用について、実態調査を行った。その結果、約70%が必要に応じて実施しており、毎時間実施は約15%であった。小テスト活用が難しい理由としては、時間がない、準備が大変という理由がほとんどで、定着確認が十分とは言えない状況である。

##### イ 授業モデルの作成

###### (ア) 学力を根拠とする確認と指導

毎時間の授業の中では、知識や技能の定着度を、教師の漠然とした感覚や印象などではなく、学力の確かな根拠となる数値で把握する必要がある。学力を根拠とする、実態に応じた指導を工夫することが学力向上のために必要である。

課題は、実態調査で明らかになった、小テスト活用にあたって、「時間がない」「準備が大変」ということである。このことに対応しながら、毎日の授業で実践できる、授業のはじめと終わりに小テストを位置づけた「5段階授業モデル」づくりと、「授業モデル活用の手引き」作成の研究に取り組んだ。

###### (イ) 小テストの活用

###### a 小テスト活用1 (レディネスの確認)

授業はじめのレディネス確認は、前時内容の理解状況を把握するために、前時終末に使った小テストを活用する。また、一単位時間内で実施できるように工夫した。

- ① 5分以内で解答と答え合わせをする。
- ② 小テストから2～3問程度に絞る。
- ③ 結果をチェックし指導に生かす。
- ④ 再度、家庭学習で練習させる。

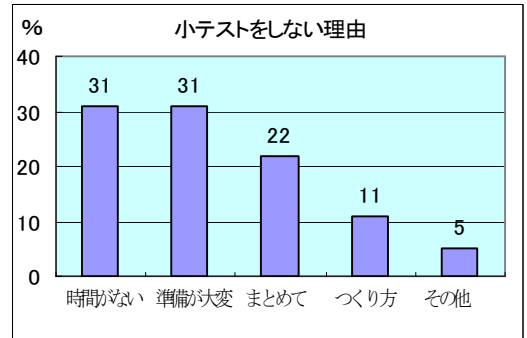
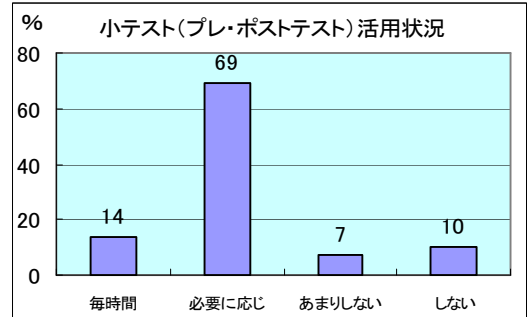


図3 【小テスト活用実態調査】

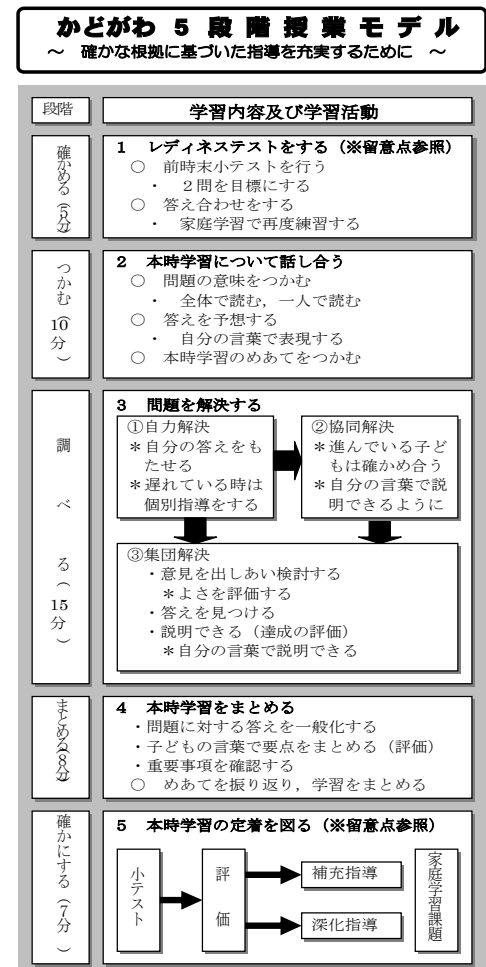


図4 【5段階授業モデル】

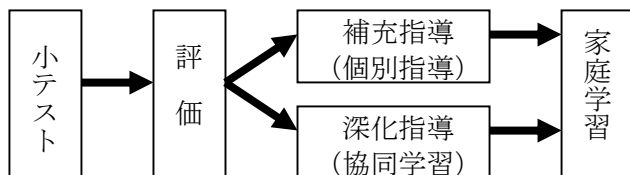
b 小テスト活用2（理解の確認）

授業の終末に行う小テストは、その時間の理解度を把握し、個別指導を行うために実施する。時間は、小学校で7分程度、中学校で10分程度、内容は基本問題と深化問題4～5問とし、実態に応じた指導ができるように工夫した。

- ① 基本問題を2問程度とする。
- ② 深化問題を2問程度とする。
- ③ 基本問題ができることを目標ラインとする。
- ④ 自己点検ができるようにする。

(ウ) 理解度に応じた指導

小テストの実施状況や結果により、補充指導と深化指導を実施する。目標通過ラインの基本問題の解答状況をもとに、遅れがちな場合は、補充指導を個別に、またグループ化して行う。進んでいる場合は、深化・発展問題に取り組み、解答や点検を相互に行うようにする。



学習後は、小テストを家庭学習で宿題として取り組ませる。また、この問題の中から基本問題を、次時のはじめに「レディネステスト」として活用する。このことにより、同じ問題を3回繰り返し学習することになり、定着を図ることができる。

(エ) 授業プラン活用の手引き作成

日常の授業の中で、この授業プランを活用するために、「活用の手引き」と「小テスト例集」を作成した。今後教職員に配布して、授業プランの実践化に生かしていきたい。

ウ 授業モデルの検証

(ア) 小学校算数科授業での検証

5年算数の少人数指導の授業の中で、単元「小数×小数 小数÷小数」を使って実践に取り組ん

**授業モデル活用の手引き例**

毎日の授業を見直すことが大切です。定着確認をしっかり！

\*授業の善し悪しは理解状況で判断しよう。

子どもが、その時間の授業の目標を達成することができたかどうかを、授業の善し悪しの基準にしましょう。

- ・よく活動した授業だった
- ・楽しくできた授業だった
- ・盛り上がった授業だった

というだけでなく、どれだけ知識や技能が身についたかで判断しましょう。

図5 【授業モデル活用の手引き例】

小テスト例

合格シール

算数小テスト  
組 番号 氏名

- ①  $14 \div 2.8 = (14 \times \square) \div (2.8 \times \square)$   
 $= \square \div \square$   
 $= \square$
- ②  $6 \div 1.5 =$  基本問題  
目標通過ライン
- ③  $21 \div 0.3 =$  深化問題
- ④  $84 \div 0.7 =$

\*1問20点として自分で点をつけましょう。赤ペンを使います。

一言感想

先生から

点

図6 【5年算数小テスト例】



図7 【小学5年算数検証授業】

だ。授業は、学級2分割の習熟度別指導の「ゆっくりコース」で行い、(小数)÷(小数)の計算方法を理解して、正しく計算できることを目標とした。

○ 小テスト活用の実際

レディネス確認の小テストでは、(整数)÷(小数)の計算問題5題を使ったが、小テストを行うことにより具体的に実態がわかり、不十分な点を補足説明することができた。

定着確認小テストでは、本時学習の類似問題4題に取り組みさせた。丸つけをしながら座席表に理解度を記録し、机間指導を行った。結果は、正答が約80%、計算ミスによる誤答が20%という状況であった。この小テストにより、本時学習の理解度だけでなく、計算が正確にできないという児童の実態も明確になり、その後の指導に生かすことができた。

○ 成果と課題

レディネス確認の小テストで実態把握をして補足説明することで、授業のレディネスを揃えて本時の学習に入ることができ、本時学習内容の理解度を高めることができた。

定着確認の小テストでは、実態に応じた個別指導や家庭学習にも生かすことができた。このような小テストの活用により、児童は、満点をとって喜んだり、次は満点をとるぞと張り切ったりして、意欲を見せていた。課題としては、授業の中で小テストを活用するためには、時間を確保するために時間の配分をしっかりと考え、指導内容を精選する必要があることも明らかになった。

(イ) 中学校社会科授業での検証

2年社会の「世界と日本の人口」(日本の人口と人口問題)で検証授業を行った。日本の人口構成の推移や各国との比較から人口問題を読み取り、少子化・高齢化が進んだ原因を考察することとおして、日本の人口の変化を、経済と社会の関係から理解させることを目標とした。

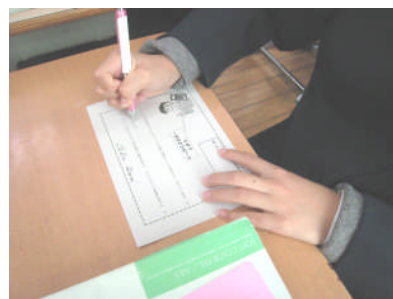


図8【中学2年社会検証授業】

○ 小テスト活用の実際

レディネス確認小テストは、基礎・基本の問題2問に絞って実施した。90%を超える生徒が正解し、達成感あふれる笑顔がたくさん見られた。社会科が苦手な生徒に達成感を味わわせると同時に、レディネス確認ができた。

定着確認小テストでは、学習内容から7題を出題した。この中で、1分間ほど再確認する時間を確保したが、90%以上の生徒が全問正解か6問正解をとることができていた。生徒は、できるという実感をもって喜んで小テストに取り組み、定着を図ることができた。

○ 成果と課題

レディネス確認や終末の定着確認の小テストを授業に位置づけることにより、確実に基礎・基本の定着が図られるとともに、授業に対する達成感を味わわせることができ、生徒の学習意欲の向上にもつながっている。また、ペアやグループで話し合う「協同学習」の場面では、生徒の思考力や判断力、表現力の高まりを見ることができた。課題としては、授業の中身を精選しなければ時間不足になり、定着確認小テストができない場合があることと、生徒に考えさせる場面との調和を図る必要があることが明らかになった。

(3) 研究の振り返り

一単位時間指導過程に、レディネス確認や理解確認の時間を位置づけることで、知識・技能の確かな定着を図ることや理解に応じた指導ができることが明らかになった。また、小テストの活用では、指導時間の不足や作成の手間が課題になっていたが、問題数を絞ることや理解度に応じた小テストを工夫することで、効果を高めることができることがわかった。これは、学力向上のためには、確かな根拠に基づく、理解度に応じた指導が欠かせないことを示している。今後、この研究をおして作成した「かどがわ5段階授業プラン」が、授業の標準として理解され、活用されるように、研究や啓発に取り組んでいく必要がある。



## 2 日常活動でのドリル学習の効果的な指導の研究

### (1) 基本的な考え方

#### ア ドリル学習の意義

授業で学んだ知識や技能を確実に定着させるためには、繰り返し学習・練習が欠かせない。ドリル学習は、日常の授業とともに学力の両輪であり、効果的な指導の工夫が大切である。

#### イ ドリル学習の課題

実際の日常の学習活動の中では、勤務時間の短縮や学校内の多忙化、実践事項の多様化などにより、ドリル学習が十分に生かされ、効果をあげているとは言えない現状が見られる。

### (2) 研究の内容

#### ア 実態調査の実施

ドリル学習についての実態調査を行い、課題や問題点をさぐり、その解決を図る計画を立てた。その中で、次のような実態が明らかになった。

- ① 多くが学校ぐるみで取り組んでいるが、実施していないところもある。
- ② ドリル学習は朝の時間に取り組むことが多いが、多くの場合担任等がついていない。
- ③ 多くが週に2回～3回であるが、実施できない場合も多い。(十分な時間が確保されない)
- ④ 単元にそったドリルがほしいが、作成が難しい。
- ⑤ ドリル学習をしても、事後指導ができない。
- ⑥ ドリル学習の効果が実感できない。

#### イ ドリル学習の手引き作成

そこで、実施されながら効果をあげきれていないドリル学習の進め方やドリル問題の作成について、参考になる手引きやドリル例集を作って、学力向上に寄与したいと考えて研究に取り組んだ。

#### ウ ドリル学習の工夫

##### (ア) 時間のつくり方

ドリル学習の時間を設けることは重要であるが、多忙な日常の中で時間を確保することは大変難しい。実態調査の中では、時間の確保について、次のような工夫が必要であるという結果を得ることができた。

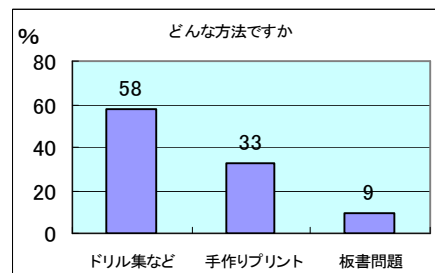
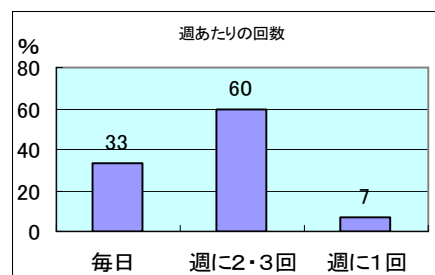
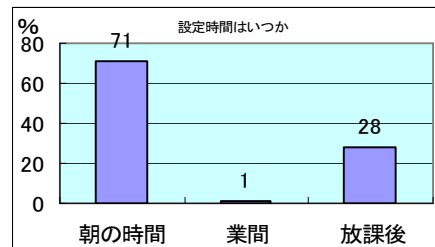
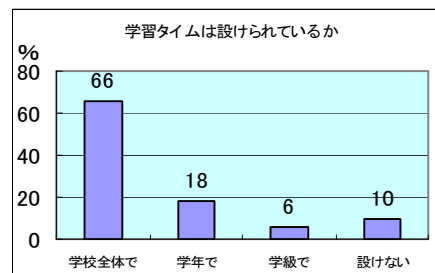


図9 【ドリル学習実態調査】

#### ドリル学習の手引き (Q&A) 例

- Q** ドリル学習の効果をあげるには、どんなことが大切ですか。
- 継続的に行う  
時々行うよりも、短時間でも継続的に、回数多く行うことが大切です。
  - 計画的に行う  
計算練習を系統的に取り組んだり、新出順に練習したりするなど、系統性や順序性を大切に練習することが大切です。
  - 繰り返し行う  
同じ問題を2回～3回繰り返し練習し、理解できたことやできるようになったことを評価しながら行うことが大切です。

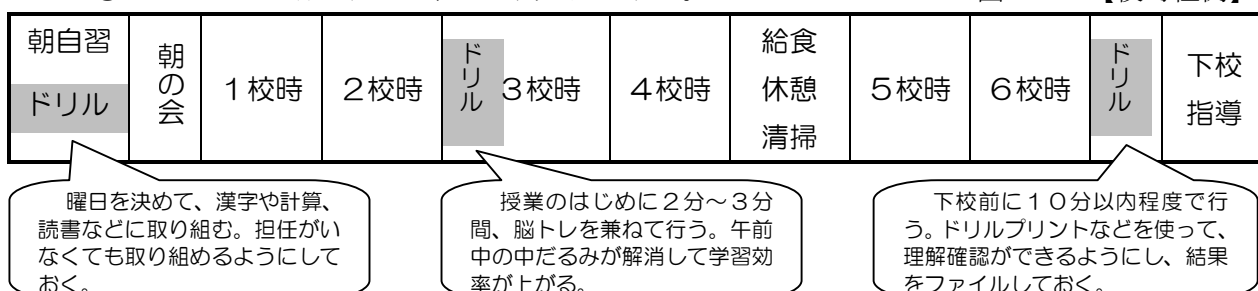
**チェック** 計画なしに、時々取り組むより、同じ問題を繰り返し練習することが大切です。

図10 【ドリル学習の手引き例】



- ① 職朝や掃除などの時間を工夫して、週に2回、読み・書き・計算に取り組む。
- ② 下校指導の前に、一斉に小テスト（ドリル）に取り組む。
- ③ 授業のはじめに、必ず漢字や計算の繰り返し練習をする。
- ④ ドリルの内容を絞って、短時間で実施する。

図 1 1 【校時程例】



学校や学年、学級の実態を考えて、まずはドリル学習の時間の確保を工夫し、継続して取り組むことが何よりも大切である。

(イ) ドリルプリントの工夫

多様な形で活用できるように、機能的なドリルプリントを工夫する必要がある。

- ① 解決のためのポイントを示す。
- ② 問題を習熟度に応じて配列する。
- ③ 自己評価ができるように評価欄を設ける。
- ④ プリントの裏に解答例をつける。
- ⑤ プリントを何回か使えるようにする。

(ウ) ドリル学習の進め方の工夫

ドリル学習は、担任などがついていない場合でもできるように、習慣形成を図っておくなどの工夫をする。

- ① ドリル学習マニュアルをつくる。
- ② ドリル学習の習慣化を図る。
- ③ 自己評価ができるようにする。
- ④ 相互に答え合わせができるようにする。
- ⑤ 同じプリントを2回～3回実施する。
- ⑥ 成長の記録を取っておく。
- ⑦ 事後の賞賛や指導を行う。

(エ) 学校ぐるみのドリルプリントづくり

ドリルプリントづくりが大変だという課題については、特定の職員に負担が大きくなるように学年ぐるみ、学校ぐるみで取り組む必要がある。また、ドリルを使ったあとの情報や結果について相互に情報交換を行い、工夫・改善を図ることが大切である。

(オ) 授業や家庭学習との関連の工夫

学校で使ったドリルは、家庭でも繰り返し活用することで効果をあげることができ、授業と家庭学習の関連を図ることができる。この中で、解答の答え合わせは自分で行い、結果は担任が把握して、できるようになったことなどを認め、賞賛するなどの工夫を行う。

**ドリル問題例** かどがわパワーアップドリル

小数でわる計算

\*かどお先生のここがポイント

**まずはこてしらべ!**

①

②

③

基本問題にチャレンジ!

**応用問題に挑戦だ!**

④

⑤

ひねった問題が解けるかな!

|        |          |       |
|--------|----------|-------|
| 全問正解   | 4・5問     | 1～3問  |
| やったね達人 | おいしいもう一息 | がんばろう |

図 1 2 【ドリル問題例】

## イ 活用の実際

### (ア) 小学5年の活用

#### ○ ドリル問題の作成

2・3学期に学習する算数の単元に対応するドリル問題を工夫・作成して、町内各学校で活用・実践に取り組んだ。

- ・ 既習事項を振り返る学習のポイントを設ける。
- ・ 学力に応じるように基本問題と応用問題で構成する。

#### ○ ドリル学習について

同じ問題を繰り返し取り組ませ、できるようになることを大切にしながらドリル学習に取り組ませた。

- ・ 同じプリントを3回取り組ませることを基本とする。
- ・ 児童だけで取り組めるようにする。
- ・ 間違ったところは、家庭でもう一度取り組ませる。
- ・ 結果をもとに、昼休み等を活用して個別指導を行う。



図1.3 【5年生ドリル学習】

### (イ) 中学2年の活用

#### ○ ドリル問題の作成

2・3学期に学習する数学の単元に対応するドリル問題を、数学担当教諭と協力・作成した。町内2校の中学校で活用・実践した。

- ・ 学力に応じる基本・応用問題で構成する。
- ・ 10分程度で解くことができる問題量とする。

#### ○ ドリル学習について

朝自習時間に3日間連続で同じ問題を繰り返し取り組ませた。できる問題が増えることで達成感を味わわせながら、問題に取り組ませるように工夫した。

- ・ 隣の生徒と交換して、相互解答をさせる。
- ・ ドリル問題を持ち帰らせ、できなかった問題を宅習として復習させる。
- ・ 結果をもとに、数学教諭と連携をとりながら個別指導を行う。

### (ウ) 成果と課題

- ・ ドリル学習(3回ずつ実施)の結果分析データから、回を重ねるごとに確実に成績が上がっていくことが分かった。
- ・ 朝のドリル学習に取り組むことで、集中力が上がり、学習の構えがしっかりできるようになった。
- ・ 成績が上がるにつれて意欲的に問題に取り組み、満点を目指して頑張る姿が見られ、達成感をもたせることができた。
- ・ 家庭でも取り組むなど、自学の習慣が身につく、自己学習力が育ちつつある。

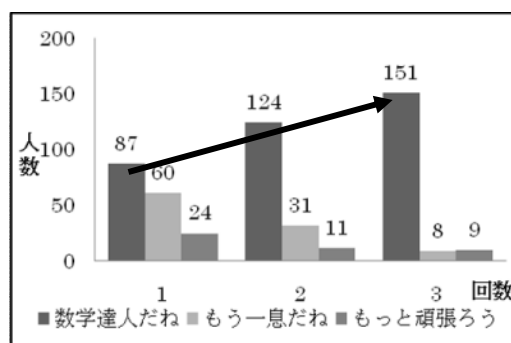


図1.4① 【ドリル学習結果例1】

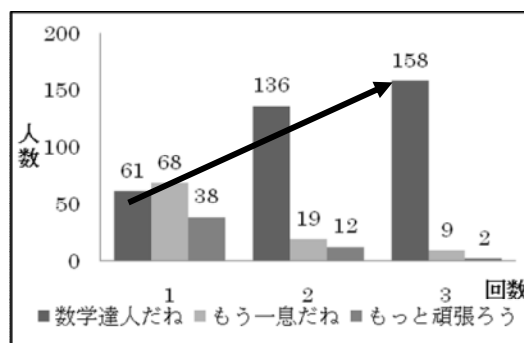


図1.4② 【ドリル学習結果例2】

### (3) 研究の振り返り

ドリル学習の効果的な指導の工夫についての研究は、学校や家庭で行われているドリル学習の問題を明らかにして、独自に「かどがわパワーアップドリル」をドリル教材のモデルとして作成することができた。また、この研究過程で、ドリル学習をどのように進めたらよいか「ドリル学習Q&A」を作成して、学校や家庭に情報提供することができた。今後は、学校ぐるみでドリル学習の在り方を見直し、効果的なドリル学習を実践するために、具体的な取組のための啓発を行うとともに、日常で活用できる、単元に即した「かどがわパワーアップドリル」を計画的に作成して、各学校に提供していきたい。

## Ⅷ 成果と課題

### 1 研究成果

#### (1) 一単位時間指導過程の研究

- 授業はじめのレディネス確認と終末の理解確認を位置づけた「かどがわ5段階授業プラン」をつくり実践することで、知識や技能の定着が確実になることを明らかにできた。
- 定着確認の小テストを活用することで、確かな根拠に基づく評価が可能になり、実態に応じた指導が充実することを明らかにすることができた。
- 「かどがわ5段階授業プラン」と「実践手引き集」を作成して、各学校へ情報提供することができた。
- 研究の成果を「教育研修資料」として毎月発行し、各学校へ情報提供することができた。

#### (2) ドリル学習の効果的な指導の研究

- ドリル学習の課題と工夫を明らかにして、効果的な指導を行うための「ドリル学習Q&A」を作成して、各学校へ提供することができた。
- 「かどがわパワーアップドリル（小学5年算数・中学2年数学）」をつくり、学校へ提供することができた。
- 研究の成果を教育研修資料や教育研究所便り「ふれあい」により、学校や家庭に情報発信することができた。

### 2 今後の課題

#### (1) 一単位時間指導過程の研究

- 「かどがわ5段階授業プラン」を、日常の標準授業プランとして定着させるための啓発と実践に取り組む必要がある。
- 小テストの活用を推進するための啓発と実践に、引き続き取り組む必要がある。

#### (2) ドリル学習の効果的な指導の研究

- 効果的なドリル学習の実践について、引き続き啓発し実践に取り組む必要がある。
- 小・中学校の各学年に応じた「かどがわパワーアップドリル」を作成して、各学校へ提供・支援する必要がある。

### ○ 参考文献

- 「授業改善と学力評価」 北尾倫彦著（図書文化）  
「平成21年度版算数ステップ学びノート」 熊本市教育センター

### ○ 研究同人

| 職名    | 氏名   | 所属     | 職名  | 氏名    | 所属     |
|-------|------|--------|-----|-------|--------|
| 所長    | 斉藤義輝 | 教育長    | 研究員 | 永倉直樹  | 草川小学校  |
| 事務局   | 岩佐陽一 | 教育総務課  | 研究員 | 高瀬満子  | 西門川小学校 |
| 研究指導員 | 山本逸馬 | 教育総務課  | 研究員 | 松岡和幸  | 五十鈴小学校 |
| 研究主任  | 長友政文 | 西門川中学校 | 研究員 | 酒匂慎一郎 | 門川中学校  |
| 研究員   | 島洋一郎 | 門川小学校  |     |       |        |